

## 『明治新五百題』について

吉澤 駿裕

明治時代の俳壇は正岡子規の俳句革新によって生まれた「新派」と江戸時代の俳諧を継承する「旧派」に分けられる。時代が下るにつれ新派とその弟子筋による俳句が中心となった。文学史においては新派が重要な位置を占め、旧派に関する研究は微々たるものに過ぎない。だが、当時の時代背景を反映していた旧派の俳諧を調査することで、明治の俳諧文化・庶民文化に対する理解が深まるものと考えられる。各題句集に焦点をあてた研究はまだ不足しており、当時全国的に需要があった『古今俳諧明治五百題』の続編にあたる『俳諧明治新五百題』も未だ詳細な研究がなされていなかった。そこで旧派の俳諧文化や当時の庶民文化を明らかにする研究資料として『俳諧明治新五百題』を研究対象として取り上げ、その全体像を明らかにすることを目的とする。

本研究では綿抜が所蔵する『俳諧明治新五百題』上下巻を対象として、その構成を調査した。収録題数・収録句数・収録俳人数・取扱い店舗数を実際に数え上げながら分析し、前作『俳諧明治新五百題』と比較しながら考察を行う。調査の過程で発見した彫り間違いについては「誤刻」として新たに調査対象に加え、どのような間違いであったか区別するために分類を行い、それぞれの数を数え上げて考察を加えた。

『俳諧明治新五百題』は題言、附言、目次、本文、人名録、刊記、広告、発行書林で構成されていた。本文は各題が太陽暦に則って季節ごとに部立で収録されており、「歳旦之部」「春之部」「夏之部」が上巻に、「秋之部」「冬之部（目次では冬季之部、本文では冬の部）」が下巻に収められていた。また上巻の夏之部の後、下巻の冬之部の後には歌仙集が付されていた。各部ごとの題数・句数は、歳旦之部が題数 140 題句数 428 句、春之部が題数 275 題句数 1296 句、夏之部が題数 315 題句数 1246 句、秋之部が題数 295 題（重複を除いて 292 題）句数 1115 句、冬之部が題数 205 題句数 1026 句で、全 1230 題（重複を除いて 1227 題）全 5111 句であった。人名録に挙げられている俳人は下総の 233 人が最も多く、全 958 人であった。発行書林は全国各地で全 250 店舗に及び、ほぼ前作と変わらなかったものと考えられる。誤刻は誤字・脱字が 10 箇所、題の書き漏らしが 18 箇所、順番を間違えたものが 8 箇所、題の重複が 3 箇所合計 39 箇所となった。

本研究では諸本調査を行えなかったが、増刷が行われた可能性は高く、特に誤刻とした箇所では諸本でどのような変更が加わっているか調査が必要である。『俳諧明治新五百題』の諸本調査については今後の課題としたい。

（指導教員 綿抜豊昭）